

「頭のいい子に育てたいわ」「それには、小さいうちから何か教えなくては・・・ね」
「そうね、でも何を教えればいいのかしら」「その前に、頭の良い子ってどんな子？」



「・・・おもしろい・・・どうして?・・・」につき合ってみよう

- ・ 2歳児のAくんは、さっきからずっと地面にしゃがみこみ“アリ”の動きをみつめています。自分の方に近づいてくると、あわててあとずさり。それでも近づいてくると、靴で踏みつけます。こんなことを あきもせず 延々と続けているのです。
- ・ 3歳のBくん 水あそびをしながら、ふと頭上のコンクリートの壁を見上げました。すると、太陽の光に反射して、水の影がゆらゆら映っているのです。Bくんは持っていたシャベルやジョーロを思わず落としてしまうほどおどろいて、固まってしまいました。そこで私は、「ユラユラしているね。あれ何かしらね」と、Bくんと一緒に見つめると、「あれはね、ユラユラ怪獣だよ」と、自分に言い聞かせるように命名しました。
- ・ 4歳のCちゃんは、ビニールの袋に砂を集めています。みていると、白い砂ばかりを選び、袋に入れているのです。どうやら ごっこあそびで、お米屋さんになっているようです。ところが突然砂の入ったビニール袋を、そのまま空中に投げ上げてあそびだしました。Cちゃんの予想は、袋の口を閉じずに投げたら、砂がパラパラと落ちてくるだろうと思い、そっと投げたのに、なんと砂が落ちないのです。そこで、「これでもか」というように、どんどん高く投げ上げ、このことに夢中になっていきます。



幼児のあそびは、このように子どもと同じ目の高さになってみると、いろいろな発見や不思議を共有できるのですが、大人の頭ではよくわからないことが多いのです。

知的好奇心を旺盛にするには、このような幼児自身のおもしろい発見やつぶやきを大切に、共感してあげることから始まると思います。

こちゃんの例でいえば、白い砂を袋に入れて運ぶ途中、たまたま何かの拍子にポーンと投げ上げてみたのでしよう。「アレ！」砂がこぼれないのです。予想に反した結果が出ると「何故？」の気持ちが起こり、集めていた目的を忘れてしまうほど袋投げに熱中してしまいます。

「不思議 何故？」これがこの時期の知的好奇心です。何年かあとになって、重力や引力の勉強をしたとき、「そうか！あの時のアレだ！」と、つながるのです。

このように、いろいろなあそびの経験があると、単なる机の上の勉強に留まらず、脳の中の知の回線が活発に作動するので、「わかり方」が違うのだと思います。

そしてまた、「お友だちの頭の上に落ちてきたら痛いから・・・」と、投げる場所を考えたり、「もし袋からこぼれ落ちたら・・・」と、部屋の中では投げないなど、他愛ないあそびの中に、たくさん大切な学びがあるのです。そして、それを教えることが必要だと思います。

だから私は、このような何気なく見過ごしてしまいがちな幼児のあそびを、大切にしたいのです。



「知的教育」 魅力的なことばですね・・・

一般的に「あの子は字が読めて書けるのよ。すごいわね」「簡単な足し算も教えているそうよ」とか「頭のやわらかい今のうちに、いろいろなことを教えたいの」「だから、いろんなことをよく知っているのね」

たしかに、特定のことを学ばせて早く大人の文化に近づけると「頭のいい子」にみえたり、「こんなこともできるのね」と、いわれるのはとてもうれしいことですね。

でも、よく考えてみると、知識はあっても「そんな事知ってるよ」だけでは生活に活かせないし、人間関係がとれないなど、むしろマイナスになることさえあります。

時期によって興味関心が異なるように、勉強の仕方も違います。幼児期は、じっとすわって頭だけを使う勉強には適していないのです。五感(感覚)をフル回転させ、全身を使ってさまざまな体験をする中で、知恵や知識を身につけていく時期なのです。

だから、幼児の「知」は「あそびで育つ」と、いわれるのです。

あそびは人から強制されるものではなく、いやいややるものでもありません。

幼児自身の興味や関心から、物事に向けてあらゆる力を注ぎこんで挑んだり、試したりするのです。そんな時、大人がみていると驚くほどの力を発揮します。少し位困難にぶつかっても、痛い思いをしても、弱音をはかずにがんばったり、何とか成功させようと知恵を絞ったりするのです。

「知識は簡単に手に入るが、知恵は汗の中からは生まれにくい」というのは、このことです。

そして、簡単に手に入った知識はすぐに忘れてしまうが、体を使って憶えたことは忘れず、いろいろな場で応用できるのです。

今、学力低下が問題になっていますが、

学力の低下も こんな育て方に原因があると思うのですが・・・（心当り ありませんか？）

- ・少子化が進むと、少ない子どもに期待をかけ過ぎたり、大人の知恵をそのまま子どもに要求してしまいがちです。
- ・また、まわりと比較し、良いにつけ、悪いにつけ、とても気になり、ついつい「転ばぬ先の杖」を出してしまいます。
- ・大人の考えた枠の中に入れて効率のよい教育を期待すると、大人には理解しにくい幼児のあそびは、「無駄」なことにみえてきます。
- ・このような中で管理されていると、子どもの伸びようとするパワーがだんだん弱まっていきます。
- ・子どもにお金をかけたり、手をかけたりするのも、みんなもやっているし、あまり気になりません。
- ・そのくせ、肝心な所はみておらず、放任になりがちです。（それほど大した問題と思わないからでしょう）

多分、こんなことが積み重なって、子ども自身のやる気を弱めているように思います。

学校側にも問題が無いとはいいいませんが、もっともっと大きな原因が、家庭にあると思うのです。

体を使い、五感をきたえるイキイキ体験を・・・これが本来幼児にとって一番楽しいことなのです。

この時期の子どもには、まだオモチャも必要ですが、身のまわりのものを上手に使って、オモチャ以上に楽しむことができます。

高価なオモチャもすぐに飽きたりするし、たくさんあり過ぎてもオモチャにあそばされていたり、収集することに興味が向いたりします。

お父さんやお母さんと一緒に、身近にあるものを使って、転がるもの、とぶもの、まわるものなど工夫したり、お気に入りのヒーローが身につけているもの・・・例えば、ベルトや武器などを作ってみたらどうでしょう。

そんなな中で、「うまくいかないナ」「こうやってみようかな」など、知らず知らず手指を使い、頭を使い、「もっともっと・・・」と、それらしく工夫するようになるでしょう。

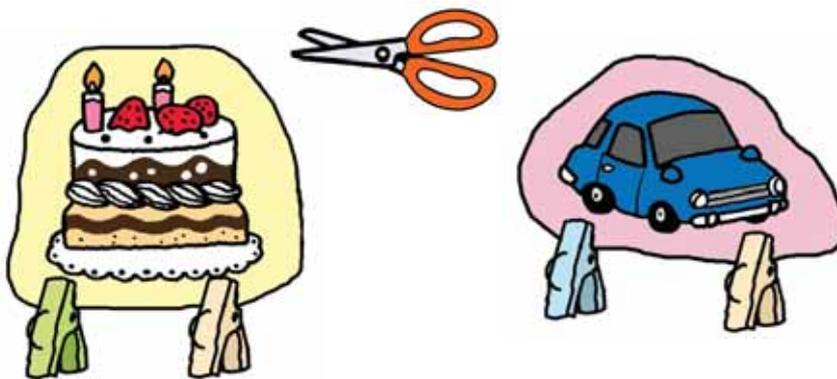


はじめからうまくいかない経験も必要です。 楽しい雰囲気と一緒に考え合い、「こんなのどう？」と、お手本をみせることも大切です。

でも、それが強すぎると「パパやママにおまかせ」になってしまうでしょう。「こうしたらどうかな。ちょっとそこ押さえて」とか「ここセロテープでとめてみて」など、「一緒につくった」と、思わせることが大事です。

考える力をつけ、指先を器用にし、その上親子の絆を強くする。

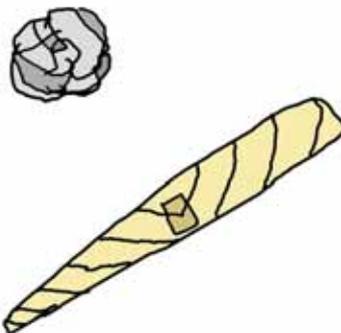
この時期、大事にしたいことが、こんなあそびの中に全部つまっているのです。



「ママ たくさんつくって
また ケーキやさんしよう」

チョコチョコキ・・・ どんな切り方でもOK
車やケーキの広告なども
洗濯バサミを使うと立ちます。

古新聞など、いらなくなった紙を丸めてつ
くった ボールやバット。
まちがってぶつかっても痛くありません



ヒーローになりきって・・・



ボールでの的当てをしたり、お金も使わず、
家の中でも、五感をきたえるあそびは たく
さんできます。

退屈する暇もないほど、毎日がイキイキ楽
しめる方法は、私と子どもとでつくるんだと
考えましょう。